

「ののしる人々のために」
マタイによる福音書 27：32－44

死刑の判決を受けたイエスは、ゴルゴダの丘で十字架にお架かりになりました。そのイエスさまを見て、人々はどんな反応を示したのでしょうか。今日の聖書箇所には、三種類の人々が描かれています。「そこを通りかかった人々」「祭司長たちや律法学者」そして「強盗たち」です。この人たちみんなが、イエスさまを見て「ののしった」と記されています。彼らのののしりの言葉はこうです。「もしも、お前が本当に救い主だと言うなら、まず自分を救ってみろ、奇跡を起こして十字架から降りてきて見せろ、救い主なら出来るはずだ。神の子なら、神さまに救ってもらえ。それができなきゃ、お前は救い主なんかじゃない。十字架に貼り付けになっている奴が神の子なんかのはずがない」。そう言って、イエスさまのことを否定したのです。

しかし、この言葉は、この時の人々だけに限ったことではありません。私たちの中にも起こってくる思いなのではないでしょうか。「こうなったら信じてやる」、そんな思いを抱くことはないでしょうか。例えば、病気が治ったら信じる。自分の願いが叶ったら信じる。このように思っている私たちが考える救いとは、今ある苦難から逃れること、それが救いだということです。そして、当時のユダヤの人々が考えていたメシアに求めていた救いも、そういうことだったのです。彼らにとっての救いとは、ローマの支配からの解放でした。

今も世界には様々な悲惨な出来事が起こっています。そのことを阻止できない神さまは信じるに値するのか、そう思う人もいるかもしれません。また、私たちの身近な生活一つとっても、理不尽な苦難は起こってきます。そういう苦しみを前にして、私たちは、神が本当に神なら、なぜ今救ってくれないのか、恵み深い愛の神がいるというならなぜこんな悲惨なことが起るのか、神が本当に神であると言うのなら、この世界を救って見せろ、この私の苦しみを何とかしろ、そうすれば信じてやる、そう思ってしまうのです。

そして、そのような問いを発する時、私たちの中にあるものは、あたかも人間が神で、神さまを人間の奴隷のようにしてしまっているということです。神さまのことを自分の願いを叶えるための単なる道具にしてしまっているということです。それゆえ、自分の役に立つ道具は大切にすけど、役に立たない道具は捨ててしまうのです。その時の私たちは、十字架の上で苦しんでおられるイエスさまを更に侮辱して、「今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう」と言った祭司長たちと同じことをしてしまっているのです。

けれども、イエスさまは、「十字架から降りれない」のではありません。そうではなく、「降りない」のです。なぜなら、それは神さまの御心ではなかったからです。そうすることによってでは、私たちの罪は決して救われないからです。

イエス・キリストの十字架は、単なる処刑ではありません。申命記 21 章 23 節には「木にかけられた死体は、神に呪われたものだ」と記されています。十字架は、まさに木に人間を吊り下げて死刑にするものです。つまり、イエスさまは、十字架につけられて死ぬことにより、神さまの呪いを受ける者となられたのです。そして、神の独り子が神さまに捨てられ、一切の呪いを受けることによって、私たちが受けるべき呪いは赦されたのです。本来、裁かれ、その罪の故に神に捨てられるべきは、私たちでした。しかし、イエスさまはそんな私達を、罪の重さ

も分からず、ののしりの声を挙げる私達を愛して、この私の罪を背負って十字架にかかって死んでくださったのです。

この方が、この私を罪から救ってくださるのです。私たちが救われるのは、自分で自分の罪を償うからではありません。私たちが悔い改めたことへの報酬として与えられるのでもありません。神さまがしてくださったことは、私たちが自分の罪を知るよりもずっと前から、赦しを与えてくださっているということです。私たちは、ただ赦されている。自分の罪に気づく前から、悔い改める前から、主イエス・キリストの十字架によって、すべて赦されているのです。そして私たちは、この主イエス・キリストの赦しを知ればこそ、本当の意味での自分の罪を知り、悔い改めるのです。しかも、それは同時に赦されているのです。赦された罪を知るのです。

だから私たちは、確信することが出来る。私たちがどんなに深い罪を犯しても、神の愛を妨げることはできないということを。罪人であっても、ありのまま人は神さまに赦され、愛されている。この命の真理こそ、私たちに平安を与えるのです。なぜなら、イエスさまの十字架の救いは、御自分をののしり、侮辱し、十字架につけた者たちの上にも及んでいるからです。だから、イエスさまの救いから外れる人は一人もいない。この神の愛と、神の真実に生きる者でありたいと願います。